

Christmas Stories Somebody's Luggage と Dickens

—愛と怨念の世界—

本 田 三 男

1 はじめに

1812年に生まれ、1870年に亡った Dickens は、1862年9月14日、Wilkie Collins (1824-89) に宛てた手紙¹⁾の中で、次のように述べている。

You will be perhaps a little surprised (and not disagreeably) to learn that I have done the opening and end of the Xmas No. (!) and that I mean soon to be at work on a pretty story for it. I think what I have done is exceedingly droll, and new. Circular letter to contributors, for said No. enclosed.

ここに言及されている Xmas No. は、同年12月4日にクリスマス特別号として、雑誌 *All the Year Round* に掲載された *Somebody's Luggage* を指しているが、手紙によると Dickens は、作品の最初と最後を先に書きあげ、その後寄稿家達に原稿依頼をしていた事が、うかがえる。又すでに完成された2篇を自ら 'exceedingly droll, and new' (とてもひょうきんで斬新) と語る部分は、この作品の性格を知る上で興味深い。さらに Dickens は、9月20日付の Wilkie への執筆依頼の手紙²⁾の中でも、

You will not be able, I suppose, to do any little thing for the Xmas No.? I have done the introduction and conclusion, and will send them you by-and-by, when the Printer shall have (Thos. Wills) "dealt with them." They are done in the character of a Waiter, and I think are very droll.

と述べて、作品の性格が、comical なものとなっていることを語っている。さらに続いて

it is a comic defiance of the difficulty of a Xmas No, with an unexpected end to it.

と語り、喜劇的性格を強調しつつも、最後の予期せぬ結末と、導入部分と結末部分の出来ばえを自負している。この喜劇的性格から、先の手紙で Dickens が語った、'droll, and new' とは、Xmas No. に一種リラックスした、肩ひじ張らない雰囲気を含めようとしていることが分かるのである。

All the Year Round のクリスマス特別号 *Somebody's Luggage* の出来上がった Index は、

	Page		Page
His Leaving it till called for	1	His Dressing-Case	26
His Boots	6	His Brown-Paper Parcel	30
His Umbrella	13	His Portmanteau	34
His Black Bag	18	His Hat-Box	40
His Writing-Desk	24	His Wonderful End	45

であるが、10月4日の Wilkie Collins への手紙³⁾によると、

You will understand that the title will be some thing like this.

SOMEBODY'S LUGGAGE

His leaving it till called for	His Collar-Box
His Portmanteau	His Brown paper parcel
His Desk	His Dressing Case
His Boots	His Umbrella

His Wonderful End

I am doing a little French story for it, which reproduces (I think, to the life) the ways and means of a dull fortified French town, full of French soldiers.

となっており、10月のこの時点ではまだ、完全な構成がなされていないことが分る。また手紙の最後にみられる、あるフランスの町を舞台とした物語は、His Boots を指しているが、この後も Wilkie への手紙⁴⁾ や W.H. Wills への手紙の中でも⁵⁾ 言及されており、この時期の、Dickens 自身のフランスへの旅行（10月17日から約2ヶ月間）と重ね合わせて考える時、彼のこの年のこの作品への特別な思い入れと自信がうかがえる。

全体で10章にのぼる *Somebody's Luggage* の中で、Dickens 自身の筆になるものは、F. G. Kitton の伝記⁶⁾ や、Clarkson Stanfield に宛た12月5日の作者自身の手紙⁷⁾ によると、第1章 His Leaving it till called for, 第2章 His Books, 第7章 His Brawn-Paper Parcel と最終章 His Wonderful End の4篇である。だが Deborah A. Thomas によると⁸⁾、Kitton 自身 'Minor Writings' の中で、'第3章 His Umbrella の一部分は Dickens の筆になるとも述べている' と記してあるが、その部分は特定出来ない。従って本論では上記4篇について、Dickens がどのような人物を創りあげ、その人物を通して、どんな世界を現出させているのかを、見て行きたいと思う。

最後に、1854年の Christmas Number, *The Seven Poor Travellers* 以降、この作品の前作 *Tom Tiddler's Ground* (1861年) に至るまで、協作者⁹⁾ の中に必ず、晩年の良き友人であった Wilkie Collins の名前が登場しており、それゆえに Dickens は *Somebody's Luggage* に関しても、執筆を依頼し続けたようであるが果たせず、これ以降 Christmas No. に彼の名が見られるのは *No Thoroughfare* (1867年) においてだけである。だが1867年のこの作品をもって Dickens は Christmas No. の出版に終止符をうっている。

2 Head Waiter, Christopher

第1章の語り手、作者は Waiter である。しかも Waiter である事に大きな誇りを持っている

る、あるロンドンのホテルの Head waiter である。彼はまず、自分の職業紹介において、Freemason's Tavern や the London 又は the Albion 等大きなホテルないしは食堂で見かけることの出来る十把一からげの Waiter 達は、Waiter の名に値しないと語り、この職が片手間で行なえるような、生半可なものでないことを語る。そして真の Waiter であるためには Waiter に生まれつかなければならぬとまで極言する。

Then, what is the inference to be drawn respecting true Waitering? You must be bred to it. You must be born to it. (p. 318)¹⁰⁾

生まれつきの Waiter こそが真の Waiter であり得る。その実例として、61年にわたる彼自身の生いたちが語られて行く。Waiter の端くれを父に持ち、Waitress を母に生まれ、牛肉や豚肉の油の臭いのしみ込んだ食堂の食器室の中で、ただ生きるのに忙しい母親からは、赤ん坊が当然要求できるはずの濃やかな愛情を受けることもなく育って行く。

Under these untoward circumstances you were early weaned. (p. 318)

こう言った生活環境でよく見られるように、彼には次々と弟や妹が、生まれてくる。その必然の結果として、生活はますます苦しいものとなり、挙句には父親が死んでしまう。彼は否応なく父の職業の世界へと入って行く。

you was took on from motives of benevolence at the George and Gridiron, theatrical and supper. (p. 320)

かくして、まだ幼いうちから、生きる為に文字通り叩き上げられて Waiter として育ち、青年となるころには骨の髄まで Waiter となっている。彼の言葉も思考も、存在そのものがまさに Waiter となっている。だから、彼の語る '真の Waiter' は、彼の人生の重みを背景に抱えているその分だけ、揺ぎない自覚となって迫ってくる。

Waiter と言う職業そのものについて、彼は次々と語って行く。そしてその口調の中には、一種独特なユーモアは感じられるものの、作者の語った 'droll' と言うよりはむしろ、厳しさが読み取れなくもない。

どんな体調の時も、どんな精神状態の時も常に自分を抑え、客に合わせなければならないプロとしての厳しさ。空腹を満たす為にやって来る客に取ってはそれ限りのことであるが、対応する側は同じ事の繰り返しである。その苦痛、厳しさを次のように表現してみせる。

Put it to yourself that it was your business, when your digestion was well on, to take a personal interest and sympathy in a hundred gentlemen fresh and fresh (say, for the sake of argument, only a hundred), whose imaginations was given up to grease and fat and gravy and melted butter, and abandoned to questioning you about cuts of this, and dishes of that, — each of'em going as if him and you and the bill of fare was alone in the world. (p. 320)

又職業がら、外出したり、休暇を楽しむことはできないのに、色々と多様な客筋の話相手にな

らねばならない。それもかなり一流の知識を持ち合わせている必要がある。世上のさまざまな事件、イタリアオペラの話、経済問題、政治むきの話し、はては競馬、農業、狩猟の話に至るまで、「常に1ヶ所で働かなければならない Waiter に、どうしてそれらの事が分るだろう。」と語りながら、実はすべての事に実に詳しい Waiter の誇りの気持ちが、逆説的に語られたりもする。

さらに「ズボンの右ポケットには常に大量の小銭を、燕尾服の尻尾の中には半ペンスを、じゃらじゃら鳴らせているので、Head Waiter は、金持ちだと思われているがそれは当たらない。」と反論するくだりでは、客の忘れ物が Waiter の取り分となる事実もさりげなく語って見せる。

How could it be found, when, beyond his last monthly collection of walking-sticks, umbrellas, and pocket-handkerchiefs (which happened to have been not yet disposed of, though he had ever been through life punctual in clearing off his collections by the month), there was no property existing? (p. 322)

こうして、Waiter の子として生まれ、Waiter の空気を吸って、真の Waiter と成長した彼 Christopher は、これもこの職業の持つ宿命か、それとも実際にはより有利な職業を求めたためか、彼の言葉では、金銭に関する嫌疑の為に店を解雇され、舞台はこの Christmas No. の展開するあるロンドンのホテルへと移って行く。

先にユーモアの香りはするが 'droll' ではないと述べたが、第1章のほぼ中間にあたるこの場面を境として Christopher を描く Dickens の筆に、変化が見られるように思える。そしてこれまでの部分がどちらかと言えば、生真面目で、意図的に構えたものを感じられたその分だけ、これ以後の Christopher は、親しみを感ずる事の出来る好人物、まさに 'droll' な人物となっている。

このホテルで Christopher は Head Waiter として働くわけだが、彼自身が Waiter として育ったやり方、それを 'the good old-fashioned' と呼ぶのだが、そのやり方を通そうとする。すなわち Head Waiter には権威と、それだけの威厳があり、すべて他の Waiter, Waitress 等は、彼の手の内にある、と言うわけである。だが、彼の思い込みと誇りとは裏腹に、周囲はそれぞれ自由に振る舞っている風である。例えば次のくだりに於いて、

The good old-fashioned style is, that whatever you want, down to a wafer, you must be solely and solely dependent on the Head Waiter for. You must put yourself a new-born Child into his hands. There is no other way in which a business untinted with Continental Vice can be conducted. (p. 323)

又 Head Waiter とはと、得意気に語る次の言葉の中で、

A Head Waiter must be either Head or Tail. He must be at one extremity or the other of the social scale. He cannot be at the waist of it, or anywhere else but the extremities. It is for him to decide which of the extremities. (p. 324)

だが Christopher の気負いはどれ程であろうと、他の従業員はどこ吹く風で、この両者の対比

が、実にほのぼのとした味を醸し出している。ささいな会話の中に、登場人物の性格を見事に織り込み、それが作品の雰囲気を作りあげて行く。

Dickens の面目躍如と言ったところである。

24 B 室のベッドの下にこの Christmas No. すべての切っ掛けとなり、Christmas No. そのものでもある荷物を見つけた時の会話、

I asked our Head Chambermaid in the course of the day,
“What are them things in 24 B?”
To which she answered with a careless air,
“Somebody's Luggage.”
Regarding her with a eye not free from severity, I says,
“Whose Luggage?”
Evading my eye, she replied,
“Lor! How should I know!” (p. 324)

この両者の会話において、完全に Chambermaid の方が優位に立っている。それでもしきりに、Head Waiter たらんとしている Christopher。ここには、ホテルでの彼の立場、彼の思い、又他の者達の彼を見る目が、凝縮されて表現されている。読者は、これまで長々と、主人公の勿体ぶった語り口に接し、Waiter もプロともなればさすがが違う、と思い始めていたその時に、ふっと足元をすくわれ、ほっとするような現実の主人公を見せられ、肩の力が抜ける。と同時に、さすがと言う思いにかられるのである。

「誰かの荷物」が誰のものか知らない、という Head Chambermaid の言葉が、どうやら嘘ではないらしいと納得させるのに作者は、大層な思考の道筋を、Christopher に与えている。彼女の言葉の確実性は、宣誓口述書のように高い（だが、これは逆に、宣誓口述書はあてにならず、彼女の言葉も疑わしいとも読める。）とか、会計係の Martin 嬢に尋ね、Head Waiter の言葉が正しいと分かった箇所において、

Inquiry of Miss Martin yielded (in the language of the Bard of A.I.) “confirmation strong.” (p. 325)¹¹⁾

とイアゴアの台詞を引用して見せたりして、実に仰仰しい。これは「Waiter は物知りなのですよ」と示しながら、きちんと ‘the Bard of Avon’ を ‘the Bard of A.I.’ (一流の詩人) と外して見せる、それによって主人公を非常に人間味溢れる存在に仕立てあげている、作者の小意気さが垣間見える部分となっている。

ここで、この Christmas No. の骨格となる「誰かの荷物」とその内容が提示される。すなわち、‘a black portmanteau’ (黒い旅行かばん一個—第 8 章), ‘a black bag’ (黒かばん一個—第 4 章), ‘a desk’ (文机一個—第 5 章), ‘a dressing case’ (化粧箱一個—第 6 章), ‘a brown paper parcel’ (茶色い紙包み一個—第 7 章), ‘a hat box’ (帽子箱一個—第 9 章), ‘an umbrella strapped to a walking-stick’ (ステッキに括られた傘一本—第 3 章) である。すでに述べたように、この中で Dickens 自身の筆になるものは、第 7 章 ‘His Brown-Peper Parcel’ であり、これについては後で見て行きたい。

さらにこの荷物は、2 ポンド、16 シリング、6 ペンスにのぼる「誰か」のホテルの付け^{かた}の形

である事が判明し、その内訳、日付け等が詳細に示され、最終章での結末への鍵として使用される。この明細は、全部で29項目にわたり、日付けは2月2日と2月3日の2日。飲食等ホテルに関するもの15項目で、残り半分が、'Pen and Paper'であったり、'Blotting-paper'であったり、曰く有りそうな'Messenger'への代金であり、読者の好奇心をかき立てる。又2日とも各1回ずつ'Tumbler broken' (コップ破損料)、'Salt-celler broken' (塩入れ破損料)が、さり気なく入れられており、「誰か」の粗忽さを示すと同時に、最終章最後の場面での、あっと驚く結末へ繋がる作者の巧みな悪戯心が隠されている。

この「誰かの荷物」は、付けの形で、何年も持ち主が現われない。従ってホテル側は、処分可能であるが、何故か放置されている。それが新参の Head Waiter の目にとまったのである。彼は付けの代金、2ポンド16シリング6ペンスを払って、その荷物を手にする。自分の物となった荷物を調べて驚いたことに、文字の書いてある、おびただしい量の紙が、荷物のあちらこちらにつっこんであり、どうやら「誰か」は物書を生業なりわいとしているようである。

What I still look at most, in connection with the Luggage, is the extraordinary quantity of writing-paper, and all written on!

And he had crumpled up this writing of his, everywhere, in every part and parcel of his luggage. There was writing in his dressing-case, writing in his boots, writing among his shaving-tackle, writing in his hat-box, writing folded away down among the very whalebones of his umbrella. (p. 328)

そして「誰かのブーツ」の中にあった文章、作品が Christopher の手で本屋 (出版社) にまわされ、印刷されて、第2章 'His Boots' となる。主人公は、荷物の処分でかなり儲を得、さらに残った書き物を印刷に布し、それがこの Christmas No. を構成すると言う枠組みともなっている。

荷物の処分に関しては、正当な処分を経て心配はないが、誰かの文章に対する後ろめたさは、最終章を一貫して流れる、作家としての Christopher の良心の呵責というメインテーマとなり、ある意味で主人公が作者自身とオーバーラップされ興味深い。

3 救われる魂

第2章は、フランスの城壁で囲まれた、小さな町を舞台にした、心を閉ざしたイギリス人の物語りである。登場人物は、主人公 Mr. The Englishman 又は、Monsieur L'Anglais と呼ばれる Langley, 下宿屋の女主人 Madame Bouclet, 彼女の友人 Monsieur Mutuel, そして Langley の心を開く役割をする孤児 Bebel (Gabrille) と彼女の後ろ楯で不慮の死を逃げる勇敢なフランスの伍長 Corporal Theophile である。Langley は、宿の2階に下宿して、窓の外を眺めながらつぶやく。

"Never saw such a people!"

"Never did, in my life!" (p. 332)

彼が英国を出るのは初めてのことで、目の前の町も人々も、彼の

a right little island, a tight little island,
a bright little island, a show-fight little island, (p. 332)¹²⁾

である英国に較べて、何もかもが異なって、違和感のある存在である。又この要塞の町至る所で見かけるフランス兵士達も彼には、

“These chaps are no more like soldiers —” (p. 332)

に思える。彼に取ってこの町に住む兵士達は、

A swarm of brisk, bright, active, bustling, handy, odd, skirmishing fellows, able to turn cleverly at anything, from a siege to soup, from great guns to needle and thread, from the broadsword exercise to slicing an onion, from making war to making omelets, was all you would have found. (p. 332)

なのである。＜町の至所に、城壁の角に、衛兵所に、すべての門で、すべての哨舎に、すべての跳ね橋に、すべての葦の茂る堀割りに、藪で埋まった堤防に、兵士、兵士、又兵士＞と表現されるように、町中が兵士によって堅固に防護されており、蟻の這い出る隙き間もないかのようである。

Langley に取って、この町はそれだけ多くの兵士がうごめいていてさえ、活気のある、生き生きとした所とは思えない。仏工兵技術の大家 Vauban (1633-1707) がこの町を、完全なまでに要塞化したその日から、町は眠り続けており、堀割の水は淀み続けていると映る。Dickens 自身10月4日の Wilkie への手紙³⁾の中でこの町を、‘a dull fortified French town’ と明確に述べており、作品の中でも、主人公の目には ‘dull’ と映っている。だが読者の目には前述の引用の如く、決して ‘dull’ であるとは思えない。それどころか、この要塞の町に生きる人々は、生き生きとしており、微笑ましい程人間的である。そして町も人々も、生の喜びで溢れている。だが、それが活気に満ちていればいる程、それを ‘dull’ と受け取る主人公の心の淀みが、まるで強風吹きすさぶ荒野の冬景色のように強烈に浮かびあがって来る。この巧みな主人公の心理描写の中に読者は Dickens の円熟を見る思いがする。

冷え切った主人公の心の鏡にも、市の立つ日々だけは違って映る。まるで魔法がかけられたかの如く突如として町は活気づく。どこからともなく、売店や屋台が出現し、あちらこちらで、値の掛け合いの音が響き、街路には商品を積んだ農夫の荷馬車や手押し車が列をなし、運河には、これ又荷を満載した舟が続く。

市では、靴、毛織物、乳製品、砂糖菓子、農産物、鶏、豚、そしてぴかぴかの農具、果ては子どものおもちゃに至るまで、ありとあらゆる品物が、心浮き立つ人々の前に並ぶ。そして極めつけは、華華しく連打されるドラムの音によって登場するエキゾチックな菓売りの美女。

だが、作者がいみじくも ‘魔法’ と表現している様に、市が終わるとこれらすべての喧噪、賑わいは、忽然と消え去り、もとの眠り、もとの淀みが町を支配する。まるで何事も無かったかのように。

Langley は、彼こそ正に何も無かったかのように、2階の窓から町を眺め、およそ兵士らしからぬ、平和そのものの兵士達に思いを馳せる。

“These fellows are billeted everywhere about,” said he; “and to see them lighting the people’s fires, boiling the people’s, pots, minding the people’s babies, rocking the people’s cradles, washing the people’s greens, and making themselves generally useful, in every sort of unmilitary way, is most ridiculous! Never saw such a set of fellows, — never did in my life!” (p. 335)

そうした時、彼の注意は、隣の床屋に向けられる。そこには Corporal Theophile なる人物が下宿しており、一人の少女の面倒を見ている。フランスのこの町に来て、すべてを第三者の目で、心動かされることなく眺めている Langley に取って、この二人の存在は唯一彼の心を掻き乱すものである。

The very image and presentment of a Corporal of his country’s army, in the line of his shoulders, the line of his waist, the broadest line of his Bloomer trousers, and their narrowest line at the calf of his leg. (p. 337)

しかも伍長は、批判的な彼の目から見ても、兵士らしい兵士で、自国イギリスの兵士に比して遜色がない。

Corporal Theophile は、訓練が終わると、いそいそと少女のもとに駆け付ける。彼はまるで、赤ん坊をあやすように彼女を抱きあげ、口付けをして、店に入って行く。その様子は、嫌応なく主人公に、おそらく喧嘩別れして逃れて来た、イギリスに居る娘と彼自身の関係を思い起こさせる。Langley は、心の窓を閉ざし、釘を打ち、目の前の二人の事を、又自分と娘の事を考えまいと努める。だが、彼の苦しみなどは無関係とばかりに、平和で、微笑ましく、又好ましい二人は、彼の前に現れては、心の窓を叩く。いつも二人で。

Always Corporal and always Bebelles. Never Corporal without Bebelles. Never Bebelles without Corporal. (p. 338)

Langley は、彼の心から二人を追い払う事が出来ず、Madame Bouclet に二人の関係を尋ねる。そして少女は孤児で、全くの他人の伍長が、彼女の後楯となっている事を知る。

“One must love something. Human nature is weak.” (p. 340)

“And the Corporal,” pursued Madame Bouclet, “being billeted at the barber’s — where he will probably remain a long time, for he is attached to the General, — and finding the poor unowned child in need of being loved, and finding himself in need of loving, — (p. 340)

この二人の関係ほど、おそらく娘を捨て、フランスに渡った Langley の心に、動揺と衝撃を与えるものは、他にない。彼が努力して、心を閉ざし、殻を作ろうとしている部分を、かくも無邪気に、天真爛漫に演じて見せられれば、彼には、それに抗するすべが無くなる。彼は他国のこの町の人々を、取り分け Corporal と Bebelles を、‘sentimental people’ と切り捨て、又十字架に飾られる花輪や刺しゅう、その他のひどくけばけばしいカトリックの墓所を見て、さら

にこの町の人々を 'sentimental' と突き放す。がその一方で、あまりにも純真さに、堅く閉ざした(又は閉ざそうとしていた)殻も、かすかに壊れ始める。其れ程に、Corporal と Bebelles の間の愛情は、自然で、てらいが無く、影響力を持っている。

フランスの小さな町に来て、町は城壁で囲まれ、至る所に防護の兵士がいる。なのに人々は、実に素朴で、すでに述べたように、人間味溢れている。その人間くささや、暖かみが、本来はそれを願っているのに、何故か、そう言う境遇になれない人物に取っては、それが美しければ美しいだけ、無視して見せたいものとなる。Langley が、人々に示す態度は、正にそう言ったものである。だが、そう言った偽りの感情ならば、抵抗出来ない程に真実で無垢な存在に接した時、本来持っている人間性の「善なる部分」が顔を出す。この作品中の主人公は、ずばりこの精神状態なのだ。

ついに Langley は、作者が '(an immense achievement)' (画期的出来事) とわざわざ付記するように、散歩中の二人に出会い、声をかけ、会話し、以来二人対一人の二組は、毎日出会うことになる。この部分も、単々と語られてはいるが、先の冷えた心の描写とは対象的に、沸き立つ、喜びの心情が感じ取れる部分で、この作品は、行間に心理描写を込めてそれを読者に投げかける実に巧く計算されたものとなっている。

Likewise, he went on for many weeks daily improving the acquaintance of the Corporal and Bebelles. That is to say, he took Bebelles by the chin and the Corporal by the hand, and offered Bebelles sous and the Corporal cigars, and even got the length of changing pipes with the Corporal and kissing Bebelles. (p. 343)

だが主人公に取って幸福なこの日々が、ある強風の日の火事によって終わる。突如 Corporal の姿が消え、次いで Bebelles も見えなくなる。主人公にはその理由が分からない。が Corporal は、不運にも消火作業の際死亡していた。あのけばけばしいと思えた墓地で、涙にくれて眠る少女を、彼の十字架のもとに見つけて、Langley の閉ざされた心は開き始める。まるで映画の場面を見ている様な美しい描写である。彼は、少女を連れ、英国の娘のもとに帰る決心をする。

以上が、第2章の筋の展開であるが、この作品は実際、Christmas No. として相応しい内容となっている。娘を捨て、祖国を去り、心を幾重もの殻で閉ざした男が、真実愛し合う人達の姿に、閉ざした心を開いて行く。ややもすると陳腐に流れがちなテーマを使いながら、少しもそうは感じさせない、美しい叙情性と重さを持った作品に仕上がっていると言えよう。

まず舞台設定の巧みさ、と言う点について見れば、この作品の中には、作者がにやりと笑いかけているような、美事な対比が造られている。すなわち、心を堅い殻で閉ざしている主人公は、'a right, tight, bright, show-fight little island' から来た 'an Englishman' であり、彼が住むフランスの町は、町中を多くの兵士が固め、城壁で囲まれた要塞の町、つまり幾重もの殻で、堅くとざされた町であり、それに反して、そこに生活する人々は、実に伸び伸びと、おおらかに暮らしている。殻に籠もった様子が窺えない。これを美事な対比と述べたが、あるいは皮肉な対比と行った方が、当たっているのかも知れない。

作者はこの作品の中で、3つのものを事細かに描いて見せる。一つは、Vauban の築いた要塞の描写で、その堅牢さが、主人公の殻の強さを暗示している。二つめは、'market-day' の描写で、その細やかさはまるで、目の前にそれを、実際に見ているかのようである。三番目は、墓地の描写に込められた驚きと、主人公の心の変化の過程を示す道具としての描写の入念さで

ある。‘market-day’の描写は、祭の賑わいと、賑わいの後の寂しさ、侘しさを示しているだけのようであるが、Vaubanの要塞のイメージは、そのまま作品のテーマに繋がり、主人公の心が開かれた後の、

See to it, Vaubans of your own hearts, who gird them in with triple walls and ditches,
and with bolt and chain and bar and lifted bridge, — raze those fortifications, and lay
them level with the all-absorbing dust, before the night cometh when no hand can work!
(P. 347)¹³⁾

〈注意せよ。汝の心を Vauban のように固める者達よ。汝等は、心を三重の門と堀り割で囲み、ホルトと鎖と障壁と跳ね橋で取り囲んで。この要塞を完全に破壊せよ。いかなる手も動かすことの出来ない夜が来る前に。〉へと続いて行く。又、

Mr. The Englishman left the Place behind, and left the streets behind, and left the civilian-inhabited town behind, and descended down among the military works of Vauban, hemming all in. As the shadow of the first heavy arch and postern fell upon him and was left behind, as the shadow of the second heavy arch and postern fell upon him and left behind, as his hollow tramp over the first drawbridge was succeeded by a gentler sound, as his hollow tramp over the second drawbridge was succeeded by a gentler sound, as he overcame the stagnant ditches one by one and passed out where the flowing waters were and where the moonlight, so the dark shades and hollow sounds and unwholesomely locked currents of his soul were vanquished and set free. (P. 347)

〈Mr. The Englishman は、Place を後にし、その通りを後にし、一般の人々の住む町を後にした。そして Vauban の軍事施設の中を、すべてを取り囲んでいる軍事施設の中を歩いて行った。〉

最初の重いアーチ形門と裏門の影が、彼の頭上にかかり、彼がそれを後にし、二番目の重いアーチ形門と裏門の影が、彼の頭上にかかり、彼がそれを後にし、最初の跳ね橋へ向う空虚な歩みに、より静かな足音が続き、二番目の跳ね橋への空虚な歩みに、さらに穏やかな足音が続き、彼が淀んだ堀り割りを、一つ又一つ越え、水が流れ、月の光の射す場所へと出て来たように、そのように陰うつな影と、空虚な響き、そして完全に錠を掛けられた、彼の魂の潮流が、打ち砕かれ、解き放たれた。〉と言う部分は、閉ざされていた主人公の心の殻が破られ、霧が晴れるように心が晴れて行く描写で、この作品中最も重要な部分となっている。第2章の全てがこの箇所を引き出す為にあると解釈してもあながち的外れとは言えないだろう。

最後に、この章では ‘colour’ が意図的に使われている様に思える。使われているものは、white (8), blue (7), red (5), green (2), golden (1), brown (1), silver (1), black (1), yellow (1) であるが、使用の頻度からも明らかなように、白、青、赤が圧倒的である。しかも白、青はそのほとんどが、Bebelle の形容に使用され、赤は Monsieur Mutuel の勲章のリボンの色である。これは作者が、作品の舞台を、主人公の閉ざされた心になぞらえて、堅く防護された要塞の町にしたのと同様に、Bebelle と Mutuel にフランスの色を使用する事により、この両者をフランスと見立て、主人公が、両者に心を開き、これを受け入れて行くと言う一つの象徴的な効果を狙ったと考えては、考え過ぎであろうか。

4 救われない魂

第7章 'His Brown-Paper Parcel' は、売れない画家の物語である。彼は単に売れないだけでなく、人生や社会に対して屈折した考えを持っている。それは自分の才能に対する自信と、それをアピールする才能を持たないと言う、劣等意識の混った、複雑な感情から生じている。主人公が自己紹介する冒頭に於いて、

Not that it's only myself that suffers from injustice, but that I am more alive to my own injustices than to any other man's. Being, as I have mentioned, in the Fine-Art line, and not the Philanthropic line, I openly admit it. As to company in injury, I have company enough. Who are you passing every day at your Competitive Excruciations? The fortunate candidates whose heads and livers you have turned upside down for life? Not you. You are really passing the Crammers and Coaches. If your principle is right, why don't you turn out tomorrow morning with the keys of your cities on velvet cushions, your musicians playing, and your flags flying, and read addresses to the Crammers and Coaches on your bended knees, beseeching them to come out and govern you? Then, again, as your public business of all sorts, your Financial statements and your Budgets; the Public knows much, truly, about the real doers of all that! Your Nobles and Right Honourables are first-rate men? Yes, and so is a goose a first-rate bird. But I'll tell you this about the goose; — you'll find his natural flavour disappointing, without stuffing. (P. 349)

<不公平に苦しめられているのは、私だけだと言っているのではありません。そうではなく、私は他の人に対するよりも私自身の傷により敏感だと言っているのです。すでに申し上げたように、絵をやっていて、博愛家ではありませんから、私ははっきりとそれを認めます。傷ついている仲間について言えば、私には十分な仲間が居ります。競争の責め苦で日々あなたは、誰を合格させているのですか。その頭と肝臓を一生の間、あなたがひっくり返して来た、幸運な受験生なのですか。いや違います。あなたは実際には、詰め込み主義の教師と、家庭教師を合格させているのです。若しあなたの主義主張が正しいのなら、どうしてあなたは明朝、町の鍵をピロードのクッションに載せ、楽隊を演奏させ、町旗をはためかせ、城外に出て、膝を折り、その教師達に請願書を読み上げ、「姿を現し、我らを統治されたい。」と懇願しないのですか。それから又、あらゆる種類の社会問題、経済問題、経済報告書や予算案に関して言えば、大衆は実際これらすべてのものの真の行為者をよく知っているのです。貴族や、貴族院議員の先生方は、一流の人々なのですか。ガチョウは確かに、一流の鳥です。しかしガチョウについて一つお教えしましょう。つまりあなたは、詰めものが無ければ、ガチョウの自然の味には失望されますよ、と言う事をね。>

世に出て成功している者達が、色々な分野にいるが、時として彼らは担ぎ上げられた存在で、実際の功労者は陰に隠れて評価される事はない。それを主人公は、自分と重ねて考え 'injustice' と語りかける。つまりこの作品は、運命や社会の不公平、不条理に対する抑えがたい激しい怒りの感情が主題となっており、その意味で、第2章の愛と平穏の世界と対極をなす、煮えたぎるような激情の物語りである。

展開するエピソードは二つ、しかも同じ内容の話題になっている。まず主人公 Thomas は、同じ下宿に住む友人 Click と Waterloo Road を散歩していて、街頭画家に群がる人混みに行き合う。路上には、控え目で、見すばらしい人物が、2本のろうそくの明かりの下で、歩道に色チョークで絵を描いている。その絵は、生きているような鮭の頭と肩、円に描かれた月夜の海、死んだ狩の獲物、渦巻き模様、信心深く瞑想する老隠者の顔、パイプをくゆらせ、指差す人物の顔、逆風について地平線のかなた、使いに赴くケルビム智天使の絵で、出来ばえは美事であり、その絵に次の文字が描かれている、

“An honest man is the noblest work of God. 1234567890. £s.d. Employment in an office is humbly requested. Honour the Queen. Hunger is a 0987654321 sharp thorn. Chip chop, cherry chop, fol de rol de ri do.¹⁴⁾ Astronomy and mathematics. I do this to support my family.” (p. 351)

<正直な男は、神の最も気高き作品なり。1234567890 £s.d. 出来れば事務職を求む。女王に栄光あれ。空腹は 0987654321 の鋭い棘なり。チップチョップ、チェリーチョップ、フォルデロールドゥー。天文学、数学。私がこれを為すは家族の為なり。>
絵かきの腕は美事で、見物人の称賛と半ペニー青銅貨を受ける。さらに年配の紳士が現れ、彼は定職まで手にする。それを見て主人公の表情に変化が生じる、

“Why, Tom,” said Mr. Click, “What a horrid expression of face you’ve got!”
Mr. Click stared at me in a sacred sort of a way, (p. 352)

そして友人 Click は、次の言葉を残して、主人公のもとを去る。

“Thomas, beware of envy. It is the green-eyed monster which never did and never will improve each shining hour, but quite the reverse.¹⁵⁾ I dread the envious man, Thomas. I confess that I am afraid of the envious man, when he is so envious as you are. Whilst you contemplated the works of a gifted rival, and whilst you heard that rival’s praises, and especially whilst you met his humble glance as he put that card away, your countenance was so malevolent as to be terrific. Thomas, I have heard of the envy of them that follows the Fine-Art line, but I never believed it could be what yours is. I wish you well, but I take my leave of you. (p. 353)

<トーマス、妬み心には気をつけたまえ。お互いの輝ける時間を、一度もより良いものにした例がなく、これからも決してそうはしないのが、かの緑の目の怪物、嫉妬なんだ。それどころか、その逆さ。トーマス、私は嫉妬深い男を恐れる。白状するが、今の君のように嫉妬深い男が怖い。君が才能あるライバルの作品に、思いを馳せている時の、君が彼への称賛の声を聞く時の、とりわけ、彼があの名刺を仕舞う時の、控え目な眼差しに出合った時の、君の顔つきは、ぞっとする程悪意に満ちていた。トーマス、美術の世界に生きる人の妬みについて耳にしたことはあるが、それが君のもの程だとは考えても見なかった。君の幸せを祈りはするが、もうお別れだ。>

もう一つのエピソードも、‘Another Imposter’ (もう一人のかたり画家) とあるように、上

記の物語りと同様な展開を見せる。今回の相手は、Henrietta と言う女性で、Thomas は恋心を抱いている。場所は Picadilly 街。今回も画家は、2本のろうそくの明かりで、歩道に絵を描いている。中央には、円で描かれた、噴火するヴェスヴィアス火山、周囲に4つの楕円の区画。それぞれに、荒天下の船、2本の胡瓜と羊の肩肉、遠景に山小屋のある黄金の収穫風景、実物そっくりのナイフとフォークが描かれている。中央の絵の上に葡萄が一房、全体の絵の上に虹。出来はこれも又美事で、絵の下には、文字が描かれている。

“The writer is poor, but not disappointed. To a British 1234567890 Public he £s.d. appeals. Honour to our brave Army! And also 0987654321 to our gallant Navy. Britons Strike the ABCDEFG writer in common chalks would be grateful for any suitable employment Home! Hurrah! (p. 355)¹⁶⁾

<画家は貧しい、が意気消沈してはいない。英国の 1234567890 大衆に彼は、£s.d. 訴える。我が勇敢なる陸軍に誉れあれ。そして又、我が勇ましい海軍に 0987654321。ブリトNZ、ストライク、普通のチョークで描く ABCDEFG 画家は、適当な職を求む、ホーム。万歳。>
この画家に人々は称賛を惜しまず、Henrietta まで心引かれる。そして今回も、

I was watching him doing it, when Henrietta suddenly whispered, “Oh, Thomas, how horrid you look!” and pulled me out by the arm. (p. 357)

次の日、彼女から別れの手紙

“Henritta informs Thomas that my eyes are open to you.

I must even wish you well, but walking and us is separated by an unfarmable abyss.¹⁷⁾ One so maligant to superiority — Oh that look at him! — can never never conduct

“Henrietta

“P. S. — To the altar.” (p. 357)

<ヘンリエッタはトーマスに、「あなたの正体が分かりました。」とお知らせます。あなたの幸福を祈りますが、散歩と私達は、深い深い淵で分離されました。優れた能力の人に、あんなにも悪意を持つ人は——ああ、あの方を見つめるあの時の目つきは——決して決して連れ出せません

ヘンリエッタを

追伸 結婚の祭壇へは。>

前回友人を失い、今回又恋人までも去って行く原因となった Thomas の顔つき、表情の変化は、何を意味するのか。Thomas の言葉によれば、

I-I-I-am the artist. I was the real artist of Piccadilly, I was the real artist of the Waterloo Road, I am the only artist of all those pavemant-subjects which daily and nightly arouse your admiration. I do'em, and I let'em out. (p. 357)

なのである。これは主人公が冒頭で述べた、受験生や政治、又ガチョウの料理の話と同質の

内容を持っているが、事が創作に関わるだけに、その押さえつけられた、持って行き場のない感情は、より激しい、歪なものになっている。

だからこそ主人公は、友人と恋人をそれぞれ、思わずぎょっとさせるような、凄まじい形相になったのだ。即座に二人をして、彼から離れさせる程であるから、おそらくそれは鬼気迫るものであったろうし、それだけ、この作品は短編ではあっても、強烈な印象を与えるものとなっている。この作品は Dickens の心理小説と呼びうるものだと言ってよいだろう。

5 素敵な結末

最終章も、第1章同様、Waiter, Christopher の語る物語で、全体を「良心の呵責」と言うテーマが流れている。がそれは読者には、彼が真剣であればある程、思わず微笑みたくなる様なもので、彼の真面目さと行間を流れる雰囲気ギャップが、作者をして 'droll' と言わせたものになっており、味わい深い。

彼は「誰かの荷物」の中に発見した作品を、出版社に売ろうとしているが、ふと不安に襲われ始める。

But I too soon discovered that peace of mind had fled from a brow which, up to that time, Time had merely took the hair off, leaving an unruffled expanse within.

It were superfluous to veil it, — the brow to which I allude is my own.

Yes, over that brow uneasiness gathered like the sable wing of the fabled bird, as — as no doubt will be easily identified by all right-minded individuals. If not, I am unable, on the spur of the moment, to enter into particulars of him. The reflection that the writings must now inevitably get into print, and that He might yet live and meet with them, sat like the Hag of Night upon my jaded form. (p. 359)

＜しかし私は、又すぐ心の平和が、この時までには心の中の平穏な空間を去り、時が単に髪の毛を薄くしていた額から、飛び去っていたのに、気づいた。それにベールを掛けるのは無駄であった。なぜなら、その額とは私自身の額であったから。そうです、その額に不安が、伝説で語られる鳥の恐ろしい翼のように、集まって来たのです。きっと心正しき人には、たやすくお分かり載だけると思いますが、若し不安が無かったらとしたら、時の勢いにまかせて、「誰か」の詳しい話しに入って行く事は出来ません。あの書き物が、今ではきっと印刷されているにちがいないと言う思いと、「誰か」がまだ生きていて、その文章を目にするかも知れないと言う思いが、夜の魔女のように、疲れ果てた私の頭の中に居据わっていた。＞

Somebody's Luggage の最終章であるこの章の中の Christopher は、その思考方法、行動で、もちろん 'droll' ではあるが、多分に作者自身と、オーバーラップされているように思える。主人公の感じる「良心の疼きや不安感」は、たまたま入手した他人の作品を、印刷に回してしまった、本業でない人物の持つ疼きや不安としては、あまりに強烈で、緊張感に満ちている。若し主人公が、Waiter で同時に作家なら理解できるが、そうなら、決してこのようには振舞うまい。彼があくまで Waiter で、作家でないなら、この最終章に現れる人物は作者自身としか考えられない。(実際に、本物の作者も登場するのだが。)

賽がなげられた後、事の重大さに気づき、悩む主人公の許に A. Y. R. から「不正」の証拠である 'The Proofs' (ゲラ刷り) が届く。さらに、第1章に出てきた、Coffee Room No. 4 の

テーブルに一人の紳士が現れ、24B室での宿泊を頼む。

彼はペンと紙を求め、6通の手紙をしたため、使いに託す。だが返答はない。相手は、いずれも Booksellers (出版社) であった。夕食時の様子や振舞いから、彼こそ「誰か」その人であると確信し、主人公は、対決の時の到来に、心悩ます。その不安の気持が又、実に巧みに表現されている。〈次の日は——私はその夜感じた恐怖に耐えています、——喫茶室のガス燈に火を点さなければならぬ程、霧の深い日だった。部屋にはまだ私達だけだった。そして私が、いかに口を尽くして語ったとしても、ガス計器の不調によって増加された、4番テーブルに座っている時の、彼の姿の揺らめくさまを、巧く言い表わすことは出来ません。〉現象的には、霧が深く、部屋は薄暗く、不調なガス燈に揺れる男の姿の不気味さを描写したものであるが、この中には同時に、Christopher の不安に^{おの}戦き、揺れ動く心情が、写し出される。

あれこれとした心の準備の後、主人公はついに告白する。

The decisive moment had arrived. With a tolerable hand, though with humility, I laid The Proofs before him. (p. 363)

だが紳士は、荷物は処分され、作品までも出版されようとしている事に、怒るどころか、見せられたゲラ刷りに対し、20ポンドもの謝礼を申し出る。

長年に渡り紳士は自分の本を出版しようとして来た。第1章でも、この最終章でも出版社に使いを出すがいずれも返答がない。同じ人物の作品なのに、又、当の本人は成功しないのに他人の Christopher の場合は一度でゲラ刷りにまでこぎつけている。売れない画家の凄まじい情念を見て来た読者にはこれ又、何と言う皮肉な運命の悪戯かと思える。ところが作者は、全作品が終わろうとするその瞬間に、正しく思いがけない結末を用意する。Christopher のゲラ刷りを受け取った真の作者である紳士は、夜を徹してゲラ刷りを訂正し、今回はそれを Christopher に託し、出版社に届ける。だが、彼の仕事ぶりは、

He smeared himself and he smeared the Proofs, the night through, to that degree that when Sol gave him warning to depart (in a four-wheeler), few could have said which was them, and which was him, and which was blots. (p. 365)

の如く、自分もゲラ刷りへの訂正もインクで汚し、どれが訂正用紙で、どれが彼で、どれが汚れか分からない状態となる。案の定出版社は、今回は使用者が Christopher ではあるが、この訂正を返してよこす。

They most likely will not appear in print, for I noticed a message being brought round from Beauford Printing House, while I was a throwing this concluding statement on paper, that the ole resources of that establishment was unble to make out what they meant. Upon which a certain gentleman in company, as I will not more particularly name, — but of whom it will be sufficient to remark, standing on the broad basis of a wave-girt isle, that whether we regard him in the light of, —¹laughed, and put the corrections in the fire.

¹The remainder of this complimentary parenthesis editorially struck out. (p. 365)

＜それら（紳士の直した訂正部分）はどうやら出版されそうにない。と言うのも、私がこの結末を書いている間に、ビューフォード、プリンティング、ハウスから伝言が届き、「我が社の力では、この訂正部分が何を意味しているのか理解出来ません。」とあるのに気付いたからです。これを聞いて、同席していたある紳士は——これ以上詳しく名前を申しませんが、彼については、海に囲まれた島国の、広大な基礎の上に立ち、我々が彼の事を——^注 次の賞賛の挿入語句は、編集上の都合で削除——と見なしているかどうかと言う事は——と述べるだけで十分でしょう——声を立てて笑い、その訂正部分を火に投じた。＞

ある紳士とは Dickens のことであり、我々読者はまさにこの作品が生まれようとする瞬間に居あわせたことになる。しかも作品の最後の最後で。これは「あっと驚く結末」大いなるどんでん返しである。しかも何故「ある紳士」の作品が出版されなかったのかと言う、読者の側の一種ミステリーじみた疑問に、「実はこの紳士 Dickens は、あまりにひどい字で、出版社はどれも彼の字が何と書いてあるのか読み取れないのです」と言う、実に人を喰ったような事実を暗示させて。

この最終章は全体として、「作家の良心の呵責」のイメージが支配的であった。ところが、最後のわずか15行で作者は、そう言ったものすべてを、あっと言う驚きの力で吹き飛ばしてしまった感じがある。だがそれでも、真の作者でない Christopher が関われば事が進み、真の作者本人が関わるや否や逆の目が出ると言う運命の皮肉に対する思いは残る。そしてこの思いは、形こそ平穏で、又かと言うある紳士の醒めた心情となっはいるが、第7章で見られた売れない画家のあの心情、怨念を連想させずにはおかない。

6 おわりに

すでに述べたように、*Somebody's Luggage* 全10篇の中で Dickens の筆になるものは4篇であるが、それを作者は、His Leaving it till called for, His Wonderful-End, His Boots, His Brown-Paper Parcel の順に書いた様である⁷⁾。ではこれらの中に、何かある統一性又は、作者の意図が込められているのであろうか。それとも各々独立した作品となっているのであろうか。最初と最後の章の主人公は Waiter の Christopher である。第1章は、全作品の導入部分で、全体の骨組みとなる様に巧みに織り上げられている。そして主人公は、非常な好人物として描かれている。Waiter は生易しい職業ではなく、長年の苦勞、積み重ねられた経験と知識、そして強かさが必要で、権威があると胸を張って見せながら、実は生いたちの貧しさと生活苦から生じているだけと言う事を垣間見せ、Head Waiter の権威や実力も、本人がそう有りたいたいと思込んでいるだけのもので、しかも周囲の自分への評価を、だれよりも良く知っており、それでいて意地を張ったり、陰険になる事もなく、周囲からむしろ好まれている人物、それが Christopher なのだ。彼のこの好好爺ぶりは、最終章でより確かに描かれる。客の残した荷物を処分し、うかつにもその作品を印刷に回してしまった事は、文筆家であればそれだけで、作家生命を断たれる事である。又決してそう言う事はやらないだろう。（もっとも Dickens は原稿依頼をした他の作家の文に、手を加えたりはしているが。）だが主人公は、それをやり、その事に Waiter らしかぬ心配をする。世間体としてだけでなく、自己の良心に照らして真剣に悩む。弟や妹、家族を養う為だと自己弁護して見せたりもする。心底 Christopher は善人なのだ。その意味で、この Christmas No. の始と終わりを締め括るストーリーの主人公としては、最適であると言えるだろう。

第2章は作者が友人に宛てた手紙の中で、前2篇以上に詳しく説明し、作品中のフランスの

町は、実際の 'two Vauban-defended towns' を正確に写したものであると語っている。それゆえに、要塞の町の細かい描写や、兵士達の息使い、おそらく時期的にも作者が実際に目にした可能生の強い market-days の生々しい描写、そして英国国教会のものとは余りに掛け離れて装飾的なナトリックの墓地の実にカラフルな描写、これらすべての描写が、作者の受けた新鮮な驚きを、物語っているようである。

周囲にあるものが、どんなに活気あるものであっても、沈滞し、淀んだ目を通せば、その活気は失せ、すべての色彩は色褪せてしまう。

この章が、人物も町もすべてが活気に満ち、むしろ天真爛漫と言える程に美しく描かれているのに、ただ一人、主人公がそれらに距離を置き、冷やかに心を閉ざし、見つめている為に、うつうつとした章になっている。言い換えれば、心の動きや、喜怒哀楽の感情の振り幅の非常に少ない、淡々とした章となっている。それはやはり、作者の美事な計算の上に立った story teller としての力量を示すものと言えるだろう。又若しクライマックスとは問えば、それは主人公の心の霧が晴れて行く場面であろうが、そこに流れているものは、とても静かな、ほっとする様な安らぎ感を読者に与えている。また最後に愛の象徴としての Bebelles を連れ英国へ向かう列車の中で、Madame Bouclet や Monsieur Mutuel の心に感じ、一人涙にくれる主人公の姿の中に、この章で作者が意図したものは何かを、はっきりと見ることができる。すなわちこの章は、愛による魂の救済の物語りで、その救われる過程は、静かで穏やかなもので、神の救いはかく有りなんと語りかけているかのようである。

ところが第7章は一転して、はげしい感情の露骨に表出された章となる。Dickens が、この Christmas No. で書いた他の3篇は、ある意味ではいずれも、人間の「善」や「安らぎ」を基盤とした物語であると言って良いだろう。だが売れない画家 Thomas は、その余りにも強烈な感情ゆえに、友人を、恋人を失う。その姿は正に、人間と言うより、社会の不条理に対する憤怒の炎が、無意識のうちに顔に現れた、鬼人の姿である。それは怨念と言って良い程の、人間の悲しい業を示すものである。若しも Thomas がこのままこの世を去れば、「彼の魂はきっと、救われ無いままこの世を彷徨うに違いありません。」と作者が、語りかけているかの様である。

だが4篇の Dickens のクリスマス、ストーリーは、この一篇ゆえに完結したと言えるかもしれない。つまり画龍点睛である。他の3篇が前述の如く、人間の「善」を基礎とした物語であるなら、この章は人間の怨念を語る物語、言葉を換えれば、前者が「救われる魂」の物語なら、この章は「救われない魂」の物語なのだ。作者自身、第1章の終わりの部分で、

But his boots was at least pairs — and no two of his writings can put in any claim to be so regared. (p. 330)

と記し、この作品には、対となるものはない、とわざわざ示しているが、以上の視点から第2章と第7章を考えて見た場合、正しく好対称、両極をなす作品になっている事は、実に興味深いことである。

注

- 1) *The Letters of Charles Dickens*, ed. Walter Dexter (Nonesuch Pr., 1938), III, P. 303.
- 2) *Ibid.*, p. 304.
- 3) *Ibid.*, p. 306.
- 4) *Ibid.*, p. 307.

- 5) Ibid., p. 312.
- 6) F. G. Kitton, *Charles Dickens, His Life, Writings, and Personality* (London, n.d.), p. 312.
- 7) Ed. by Dexter, *The Letters*, III, p. 323.
- 8) 'Contributors to the Christmas Numbers of *Household Words* and *All the Year Round*, 1850-1867', *Dickensian*, 70 (1974), p. 24.
- 9) 注 8 の Doborah A. Thomas の協作者リストによると His Umbrella の作者は、劇作家で翻訳家の John Oxenford (1812-1877), His Black Bag, His Writing Desk の作者は、Wilkie Collins の末弟で、作家で画家の Charles Collins (1828-1873), His Dressing-Case の作者は一時期金ブーム熱に浮かれてオーストラリアに移住したこともある異色の Arthur Locker (1828-1893), そして His Portman-teau, His Hat-Box の作者は *The Valley of a Hundred Fires* (1860) を書いた女流作家 Julia Cecilia Stretton (1812-1878) である。
- 10) 本論で示すページは、Oxford Illustrated Dickens (London, 1956) の *Christmas Stories* のそれを示す。
- 11) cf. *Othello*, Act III, sc. III, ll. 23-25.
 Trifles light as air
 Are to the jealous confirmation strong
 As proofs of holy writ:
 Bird of A. I. [ei wan] (一流の詩人) は、Bard of Avon [éivən] をもどったものだが、それをロンドン子の Christopher は、正統な発音としているのである。
 コックニーを使用した Dickens の手腕の良さがここにみられる。
- 12) J. W. T. Ley, 'More Songs of Dickens's Day,' *Dickensian*, 28 (1932) によると, "Member for Verbosity" の "The Tight Little Island" から取られたものである。
- 13) The New Testament, *John*. 9: 4
 We must work the works of him
 who sent me, while it is day; night comes,
 when no one can work. を引用したもの。
- 14) J. W. T. Ley, 'More Songs of Dickens's Day,' *Dickensian*, 28 (1932) によると,
 An astonishing doctor has just come to town,
 who will do all the faculty perfectly brown:
 He knows all diseases, their causes, and ends;
 And he begs to appeal to his medical friends.
 Tol de rol:
 Diddle doll
 Tol de rol, de rol. のリフレインを使ったもの。
- 15) cf. *Othello*, Act III, sc. II. 165-8.
 Iago. O, beware, my lord, of jealousy;
 It is the green-eyed monster which doth mock
 The meat it feeds on;
- 16) J. W. T. Ley, 'More Songs of Dickens's Day,' *Dickensian*, 28 (1932) によると, "Britons! Strike Home" と言う歌は Purcell の "Bondica" の中に見られる流行り歌で Dickens はこれを引用した。
- 17) 'unfarmable' は Henrietta が 'unfathomable' と間違っただけを使ったものと思われる。

なお、本論を書くにあたり、広島大学英国小説研究会の会員の方々から、多くの貴重な助言と含蓄ある示唆を受けた事を、深く感謝する。

(英文学科 助教授)

—昭和 61 年 9 月 29 日 受理—